

お茶うけ 第74話

ボタンと衣装

東京の日本橋浜町に、数々のボタンを集めて展示している「ボタンの博物館」があります。これは、ボタンのメーカーであるアイリス社が自社ビルの4階に開設しているもので、ロビーの窓からは目の前を流れる隅田川の沿岸の風景を楽しむことができます。この景観がかわれて、3階のオフィス部分は、人気映画 "Shall We Dance?" の主人公の勤務するオフィスとして 映画にも登場したという一幕もあるそうです。

ここには、ボタンが普及しはじめた17世紀ごろのアンティークなボタンから、ごく最近のもので、さまざまな色や素材や意匠のボタンが展示されており、ふだんは脇役をつとめるボタンが主役となって服装史を繰り広げています。その展示品や、同社編集の「ボタン事典」および "The Button Book" などの語るボタンの物語を一部ご紹介します。

まずボタンの起源をたどってみると、1cmから10cmほどのボタンの形をしたものが エジプトやメソポタミアなどの紀元前4千年ごろの遺跡から発見されているということです。これは創造神ケペリの化身とされる「スカラベ」というコガネムシの一種を形どって固い石や石灰岩などで作られたもので、中にはうわぐすりや施された美しいものもあります。しかし、古代の衣服は長い布をゆるやかに流したり巻いたりするものがほとんどでしたから、これらはいわゆるボタンとして使われたのではなく、装飾をかねたお守りであったようです。また、印章として使われた例もあります。



ボタンという言葉が文献に現れはじめたのは、12,3世紀ごろで、遠征に出かけた十字軍の将兵が、サラセン人(イスラム教徒)の衣服に ボタンが使われていることを報告したのが最初です。前開きのボタン留め形式は、もともとは中央アジアの服装で、それが西欧に導入されたもののようです。

ボタンが、ひもやブローチなどの留め具に代って必需品になったのは、人びとが体形に合った服を着るようになったゴシック時代からのことです。下着をつけ、上着を着て、その上にマントを羽織るといった現在の洋装の原型はこの時期に現れました。

ルネッサンス期になると 服飾品の材料も豊富になって技巧も発達し、着る文化が生まれました。このころには西洋衣服はほとんどが前開きとなり、上着も体にぴったりするものが好まれて、ボタンは便利な留め具として普及していきました。現在の男子服の右前合わせの風習もこのころからといわれています。

王侯貴族の服装には、男女ともに前立てや袖に豪華な刺繍をほどこした布製のボタンをたくさん並べたものがデザインされ、ボタンは次第に装飾品とみなされるようになりました。17世紀末になると、金、銀、象牙、宝石などを用いたものが出回り、熟練工によって一個一個いいに作られたボタンは、ステイタスシンボルとして貴重な装飾品となりました。さらにダイヤモンドのボタンまで出るにおよんで 衣装代は天井知らずとなりますが、行き過ぎた華美な競争はやがてフランス革命によって終焉を迎えます。その当時の美しいボタンは、この博物館にも何点が展示されていて、華やかな往時を偲ばせます。

さて、上にも述べたように男子服は右前合わせですが、なぜか婦人服は概ね打合わせが反対になっています。これについては、興味ある説明がありました。それによると、上流階級でも男性は自分で服を着たので、ボタンは右手で留めやすいように服の右側につけたが、婦人はメイドなどに着せてもらう習慣だったため、相手が留めやすいように左側につけたということです。それで、映画「ローマの休日」の一場面を思い出しました。親善旅行中のハードなスケジュールに神経をいら立たせたある国の王女が、侍医に睡眠薬を注射されたあと 宿泊先の大使館を抜け出したものの意識がもうろうとなり、通りがかった新聞記者に助けられて彼の部屋にかつぎこまれ、ベッドに寝る段になって半分眠ったまま「服を脱ぐのを手伝って」といって 相手をあわてさせるくだりです。無意識的な習慣によって高貴な人物であることを コミカルに印象づけています。

私はさっそく百貨店の売り場を歩いて調べたところ、たしかに男物のボタンは右側に、女物のボタンは左側についていました。ボタン発生当時の上流階級の風習は今も残っているようです。ただし、女性用の売り場でも、ジーンズ系の服には、右ボタンのジャケットもありました。係員の話によると、スポーティーなものや 男女兼用で着られるものには、右ボタンが増えているそうです。変化の兆しが、かすかに感じられました。

以上

参考文献:

「ボタン事典」阿部和江編 (株)アイリス 大隅浩監修 (株)文園社 1999年刊

"The Button Book" by Diana Epstein, A Running Press Miniature Edition, Running Press, Philadelphia・London, 1996

「ボタンの話」(株)アイリス マーケティング部編 (株)文園社 昭和61年刊

「うた日記」森鷗外著 岩波書店 1940年刊